剣道時代
10 No.351 OCT 2001
CONTENTS

全日本剣道連盟杯争奪 第10回ハンガリー国際剣道大会

2001年7月25日(水)～29日(日)◆主催／ハンガリー剣道連盟

レポート＝阿部哲史(ハンガリー剣道連盟技術局長)

気品と壮麗の国の剣道大会が節目を迎える

「気品と壮麗の国」「ヨーロッパの隠れた宝石」と称されるハンガリー。そのハンガリーで毎年開催されている本大会が10年の節目を迎えた。体制転換後、新政府が成立した1990年に第1回大会を開催し、徐々に参加者を増やし、今年は14ヵ国200名以上の剣士が首都ブダペストに集った。

14ヵ国から200人以上の参加者

7月25日から29日の5日間、ハンガリー共和国の首都ブダペストにおいて、第10回ハンガリー国際剣道大会(通称ハンガリーカップ)が開催された。大会の内容は別掲の通りである(表1)。

例年、近隣7、8ヵ国から参加者を募る本大会だが、今回は14ヵ国から200名を越える人々が集まった。常連では、ルーマニア・ユーゴ・スロバキア・チェコ・オーストリア・ブルガリア・ドイツからのクラブチーム。初参加では、スイス・フィンランド・ロシアといった欧州の国々からであったが、ブラジル、それとカリブ海のアルバからも1名ずつの参加者があった。日本からは、岐阜大と浜松大の剣道部、それに長野県大町市にある大町少年剣道クラブから総勢60名が遠路はるばる足を運んでくれた。

連日30度を超す暑さの中、講習会は市内にあるエトボシ・ヨーゼフ高校の体育館で行なわれた。指導は、主な参加団体の代表者が担当した。

木村隆一(大町少年剣道クラブ・教士七段)
岡田正司(千葉県高校教員・錬士七段)
今井　一(岐阜大学助教授・教士七段)
藤田弘美(福岡県行橋中学校教諭・教士七段)
菊本智之(浜松大学助教授・錬士六段)
亀本竜太郎(オーストリア剣連盟盟・五段)
今村昭憲(スウェーデン剣道連盟・五段)
バダディ・ジョルト(ハンガリー剣道連盟・五段)
阿部哲史(ハンガリー剣道連盟・六段)
原口展昭(ハンガリー剣道連盟・青年海外協力隊・五段)
紫関左恭(ルーマニア剣道連盟・青年海外協力隊・四段)

参加者数が予想を大きく上回り、最終日は

表1
【大会スケジュール】

	午前(10:00-12:00)	午後(14:00-17:00)	夜
25日(水)	受付	剣道稽古	
26日(木)	日本剣道形	剣道稽古	
27日(金)	剣道稽古	親善試合／剣道形	
28日(土)	個人試合	個人試合	
29日(日)	団体試合	昇段審査会	サヨナラパーティー

170名での稽古となった。体育館の広さに余裕がなく、打ち込みと地稽古中心の稽古になってしまったが、東欧諸国からの参加者の目当ては、やはり日本人剣士との稽古である。とくに今回は日本からの参加者が多く、「何人もの日本人と稽古が出来て嬉しかった」と多くの参加者が満足げに感想を話してくれた。

親善試合「ハンガリーカップ」

27日午前、ハンガリー代表チームを中心とした講習会参加者の選抜チームと浜松大チームの親善試合が行なわれた(表2)。ここ数年恒例になっている企画であるが、今年は大町少年剣道クラブの女子選手も参加し、大会を盛り上げた。欧州で稽古に励む剣士にとって日本人学生との対戦は貴重な経験である。内容は、学生チームに終始押され気味ではあったが、食い下がる立合も数試合あった。

28、29日は、ブダペスト警察訓練センターに場所を移して個人戦と団体戦が行なわれた。男子個人戦139名、女子個人戦24名、団体戦26チームと過去最高のエントリーとなった。試合方式はすべてトーナメント方式、出場条件は、男女とも14歳以上で団体戦はクラブ単位だ。

表2

【女子】

日本人チーム			選抜チーム
木　村(大町少剣)	メコ		ドシュエル(ハンガリー)
市　川(浜松大学)	コメ		ボスハイド(スイス)
富　岡(浜松大学)	×		キラーイ(ハンガリー)
小野田(浜松大学)	×		ポレポー(フィンランド)
太　田(大町少剣)		メ	シボシュ(ハンガリー)
2勝	4本	1本	1勝

【男子】

浜　松　大			選抜チーム
諸　田	コメ		ドゥビ(ハンガリー)
梅　部	メメ		ベルグ(ハンガリー)
近　藤	メ	メメ	キラーイ(ハンガリー)
中　村	メ反		バログ(ハンガリー)
石　松	メ ×	メ	エルディー(ハンガリー)
鈴　木	×		木村(ブラジル)
江　藤	メ ×	メ	バダディ(ハンガリー)
川　島		ド	サローネン(フィンランド)
大　石	メメ		バラニ(ハンガリー)
4勝	11本	5本	2勝

個人戦は、日本選手に対して欧州選手がどれだけ粘れるかが試合の見どころだった。日本人相手に腕試し気分で参加する選手も多く、1回戦から気迫のこもった試合が展開された。序盤では、春の欧州選手権ジュニア個人3位のドゥビ弟(ハンガリー)対近藤(浜松大)、ドゥビ兄(ハンガリー)対上出(岐阜大)、同じく欧州男子個人で優勝したエルディ(ハンガリー)対梅部(浜松大)の試合が観客の注目を集めた。

ベスト16が決定した時点で、日本選手が10名勝ち上がった。ベスト8になると、日本勢以外はハンガリーのバラニとエルディの2名のみとなった。この2名も、エルディが上段の諸田(浜松大)に延長で粘り負け、小柄ながら突進力のあるバラニも中村(浜松大)の遠間からのメンに屈して姿を消した。浜松勢同士の対決となった準決勝は、第一試合で石松が諸田を、第二試合では大石が中村をそれぞれ降して決勝へ駒を進めた。

選手の呼吸が聞こえるほどに静まりかえった会場で始まった決勝戦は、両者真っ向から攻めを仕掛け、決勝戦に相応しい試合となった。試合は延長戦にもつれ込み、最後は大石が良い機会に豪快なメンで石松を仕留めた。その瞬間、会場にはどよめきと拍手が巻き起こった。

女子の部は24名がエントリーされた。日本選手が10名を占めていることもあり、欧州選手は苦戦を強いられた。上位入賞が期待されていた欧州個人選手権者のキラーイも、3回戦で富岡(浜松大)の粘りに屈して姿を消した。欧州勢では、フィンランドから参加したポレポーだけがベスト4に残った。準決勝は、木村(大町)対渡辺(岐阜大)、ポレポー(フ

【試合成績】

▼男子個人戦
優勝　大石　和広(浜松大)
2位　石松　憲次(浜松大)
3位　諸田　崇志(浜松大)
敢闘賞　ティボール・バラニ(ハンガリー)
〃　オスカール・木村(ブラジル)

▼女子個人戦
優勝　木村　真央(大町少年剣道クラブ)
2位　富岡　雪子(浜松大)
3位　スザンナ・ポレポー(フィンランド)
敢闘賞　渡辺　愛(岐阜大)
〃　バルバラ・キラーイ(ハンガリー)

▼団体戦
優勝　浜松大
2位　シゲットクズィジュニア剣道クラブ(ハンガリー)
3位　岐阜大
敢闘賞　クリスティアン・レトウ(オーストリア)
〃　ドゥビ・シャンドール(ハンガリー)

団体戦優勝・浜松大

団体戦2位・シゲットクズィジュニア剣道クラブ(ハンガリー)

団体戦3位・岐阜大

男子個人戦。優勝・大石和広、2位・石松憲次、3位・諸田崇志(以上浜松大)

女子個人戦

優勝・木村真央(大町少年剣道クラブ)

2位・富岡雪子(浜松大)

3位・スザンナ・ポレポー(フィンランド)

インランド）対富岡（浜松）の対戦。現役高校生で圧倒的な強さを見せる木村、それと粘るポレポーを振り切った富岡がそれぞれ決勝戦へ進んだ。

決勝戦は、勢いに乗った木村がマイペースで富岡を攻め、危なげなく勝ちを収めた。木村は長野県松商学園に通う高校生剣士。欧州では女子高校生の剣士は珍しく、多くの選手が興味をもって観戦していたのが印象的だった。3位決定戦では、ポレポーが果敢に攻め立てる渡辺をしのいで勝ちを収め、欧州選手のなかで男女唯一の入賞を果たした。

29日の団体戦は、11ヵ国からエントリーした26のクラブチームによってトーナメント戦が行なわれた。条件はクラブ単位なので、各クラブの正式会員であれば個人の国籍は問われない。したがって、国籍の異なるメンバー編成で参加するチームもいくつかあり、欧州ならではの楽しい雰囲気のなかで試合が行なわれた。

Aコートでは、浜松大が危なげなく準決勝まで勝ち上がる。同じく優勝候補の岐阜大は近年実力をつけつつあるブカレストのイカダ（ルーマニア）に多少てこずる場面が見られた。一方Bコートでは、早くも2回戦で大町少年剣道クラブと昨年の優勝チームであるシゲットクズィジュニア剣道クラブ（ハンガリー）が激突。大町は動きの良い北澤と久保田を擁するため有利に見えたが、試合は1勝1敗で西澤とエルディの大将戦までもつれ込む。中盤にエルディがコテを奪い時間切れとなり、シゲットクズィが辛くも3回戦に駒を進めた。

準決勝の第1試合は、浜松大と岐阜大の対戦。混戦の予想を反して浜松大が5対0で岐阜大を退けると、第2試合では、大町を破って勢いに乗るシゲットクズィがポドロギツィサア（ユーゴ）を一方的に降した。

決勝戦、攻撃の手を緩めない浜松大の諸田が先鋒戦を奪うと、次鋒戦も江藤が得意の引き技で早々と連取。一方的な試合になるかと思われたが、シゲットクズィの中堅・ドゥビと副将・キラーイが引き分けと大健闘した。勝敗はすでに決まったものの、前日の男子個人を制した大石、そして春の欧州個人選手権者のエルディの大将戦には観客も固唾をのんだ。正面から大技で攻防する試合は、一本ずつ取り合った時点で時間切れとなった。会場は昨日同様、拍手喝采で幕を閉じた。1回戦から終始、おごることなく格下のチームにも全力で戦う浜松大の試合ぶりは、選手と観客にさわやかな印象を与えていた。

団体試合は、来賓の松本和朗在ハンガリー特命全権大使に観戦いただいたが、内容の濃い試合に感激され、「来年もまた観戦したい」と話をされていた。閉会式では松本大使にスピーチをいただき、入賞者への賞状とカップの授与をお願いした。

敢闘賞には、2位入賞に貢献したシゲットクズィジュニア剣道クラブのドゥビ兄、そして浜松大のペースメーカー上段の諸田を見事なコテで仕留めたオーストリアのレトウが選ばれた。

生活習慣と密接に関わることに
剣道の存在価値あり

大会は、試合後に昇段審査が行なわれて終了した。その晩は、宿泊先の寮で恒例のサヨナラパーティーが催された。予算の関係で飲食物は質素にならざるを得ないが、欧州剣士にはこれも大会の楽しみのひとつとなっている。剣道では日本式に稽古も試合も行なうが、パーティーだけは欧州方式を貫く。主催者側の挨拶もなければ揃っての乾杯もなく、気が向いた者同士が話し込み、食事する者、ひたすら飲む者、夜通しダンスに興じる者、それぞれが好きなように時間を過ごす。日本からの参加者も最初はわけの分からないペースに緊張気味だったが、最後には外国選手と言葉を交わし、乾杯を繰り返しては音楽に合わせて輪の中心で踊りに興じていた。

ハンガリーカップは1990年に始まった。元々、この大会は剣道が普及しはじめた東欧諸国で剣士の交流を広げるために企画されたが、元社会主義国の連盟ということもあり、経済的に苦しい時期が随分とあった。そのたびに、全日本剣道連盟をはじめ、在ハンガリー日本大使館など多くの日本関係者の支援協力を受けてここまで継続してきた。当初は2、3ヵ国から数10名の参加で細々と行なわれていただけに、ここまで盛大に10回大会を開催できたことは関係者一同満足すると同時に、多くの関係者に感謝している。

ところで、今後どういった方向にこの大会を発展させていくのかは当連盟で熟考すべき大きな問題である。というのも、試合偏重の風潮にあおられて大会が試合のための行事になりつつあるからだ。確かに、試合は剣道にとって欠かせない稽古方法ではあるが、現在の欧州剣士には、試合そのものよりも、日本文化としての剣道に興味を抱いている人の方が多い。とくに最近は競技スポーツ感覚よりも長いスパンで剣道継続の意味を捉える人も増えている。自分の生活の一部に剣道を組み込み、剣道を通して肉体的にも精神的にも生活を豊かにしていく。こんな姿勢が、欧州にはない日本文化として定着しはじめているともいえる。

休憩時間に日本剣道形の稽古をするユーゴの少年剣士

欧州剣道は30年以上の歴史を有するが、人びとは異文化として剣道を受け入れる以上、それが自分の生活にメリットを及ぼさない場合は、それを価値ある文化とは認めたがらない。剣道がプロ的な競技スポーツとしてこの先発展すれば、それはそれでひとつの文化価値（収入源として）が生まれるわけだが、それはあり得そうもない上に、それを望む欧州剣士もほとんどいない。やはり、欧州での剣道の存在価値は、人間の生活習慣と密接に関わり合うところにあり、人々もそれに期待し魅了されて稽古を続けているのではなかろうか。

このような基本的な視点を考え直すと、ハンガリーカップの発展方向も明らかになってくる気がする。決して試合を否定するわけではないが、同じ試合をするにしても、試合に勝つための方法を追求することにどんな価値を見出せるのか。あるいは勝つために先人はどんな努力をして、どのような稽古方法を見出してきたのか。単なる実技の講習・試合にとどまらず、こういった剣道史・技術論と関わる内容を講義のなかで、現地人が理解しやすい言葉で正確に伝えることができれば、欧州における剣道の価値もさらに高まっていくものと思われる。来年はこういった企画もハンガリーカップの中に取り入れていく準備を進めていく予定である。